



取り締まり戦線に  
異状アリ!!

新型  
激増確実!

実録!!  
オービス密着  
24時

Real Tune & Exciting Car Magazine [オプション]  
<http://www.jdm-option.com/>

# option

2015  
April

4

OPTION 2015年4月号(毎月26日発売)2月26日発売  
第35巻第4号 通巻459号 1981年8月3日 第3種郵便物認可

深ルムを履きこなせッ!!

## Wheel Trend 2015



大阪オートメッセ 注目マシンレポート

HKS × 斉藤ダイゴ R35GT-Rで世界のドリフトに挑む!!

走り屋マンガ“RPM” 激速少年の正体が明らかに!!

### OPTIONスーパーLAP in FSW

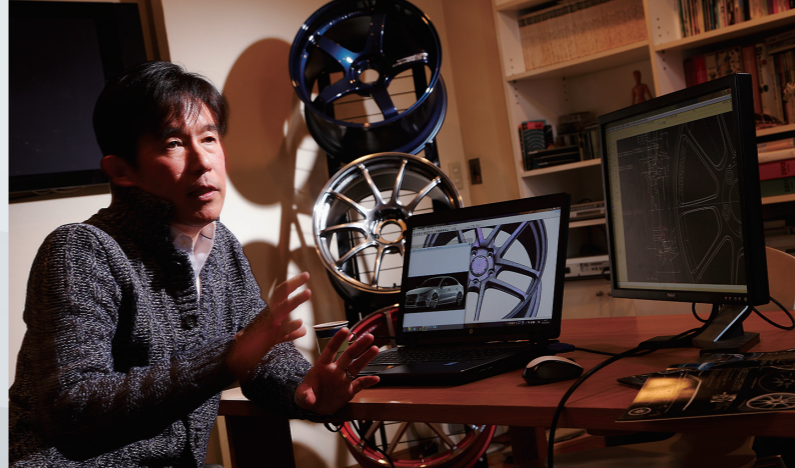
マイナーチェンジ&快適過給術

## 86/BRZチューン最前線



アドバンレーシングシリーズは、センターキャップレスが標準。というも、センターキャップのことを考えてデザインすると、このようなセンターの落とし込みができないから。逆にAVSシリーズは、センターキャップまでデザインに取り込んだ上質さが特徴。そのためセンターの落ち込みは種々なモデルが多い。

「3Dソフトでも立体的な形状は確認できますが、いろいろな光で見ることができないし、影もつけれない。だから実際の見え目とは違う印象になることが多くて信用していないんです。必ずモックアップを作って、いろんな角度から見たり、転がしてみたりしながら、デザインの仕上がりを確認します」。ここでの確認でOKとな



横浜ゴム 萩原 修さん

Knowledge #2

# スポーツホイールデザインの真理

## ADVAN Racing デザイナーインタビュー

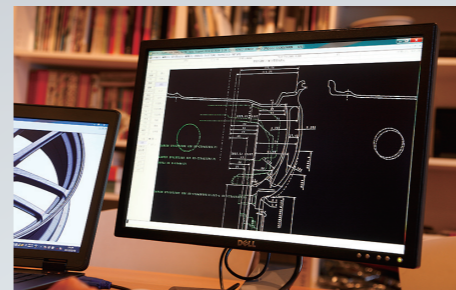
取材協力 YFC ☎050-7544-7360 <http://www.yokohamawheel.jp>

「ADVAN Racing」や「AVS」など人気ブランドを持つヨコハマホイール。そのデザインや設計を担当しているのが、萩原 修さん。93年、グループA時代のJTC第3戦SUGOで、HKSスカイラインGT-Rを駆り優勝したことで知られるが、ヨコハマのホイールデザイナーとして数々の名作を誕生させてきた人物である。そんな萩原さんが、どのようにしてカッコいいホイールを生み出しているのか？ デザインや設計へのこだわりを追ってみた。

### 革新ではなく些細な ディテールを突き詰めて チューンドに似合う 美しさを追求する

ウルトラ美人な  
ホイールを作るという発想

萩原さん自身はデザインを専門で学んだわけではなく、クルマ好きであることが原点。美術的にどうこうとは考えず「クルマに似合ういろいろな角度から見ても美しいホイールをデザインする」というシンプルなお考えを持つ。「基本的にホイールは、幅、インセット、ブレーキキャリアの逃げ、という3点のサイズの制限を考えながらデザインしないと具体的なものになりません。だからフリーハンドでデザイン画を描いたりせず、車両のサイズデータが入ったCADソフトに向かって



ブレーキキャリアの位置情報や、主要車種のインセット情報などが入っているCADソフトを会社にも萩原さんの自宅にも完備。思いついたその場で作業ができるようにしているという。



CADで基本的な設計をすれば画面上に3Dで表示できるようにもなるが、萩原さんはこの3Dの画像をあまり信用していない。光のあたり方や陰影によって、ホイールの見え方が違って来るからだ。

いきなりデザインを描いていきまふね」と語る。

実際にCAD画面を見ると、こと細かに様々な車種のキャリアの位置情報が書き込まれており、これらの逃げを考えながら1mmでも多くコンケイブできるように基本デザインを決めつつ、思い描いたディスクデザインをデータ化していくのだという。「あまりデザインの新しさを求めないものに傾いてしまおうと、クルマにつけたときの印象が変わってしまう。だからこそディテールにはこだわりの持ち、時間が許す限り詰めることを心がけていますね。人間の顔もそうなのですが、基本構成は同じでも十人十色な顔つきがありますよね。そんな中でもウルトラ美人な人は、目にしても、鼻にしても、些細なディテールがいい形だからこそ美人に見える。ホイールも同じで、些細なディテールにこだわって初めて、ウルトラ美人なホイールになると思うんです」。

ディテールの手直しは、基本デザインが完成した後には3Dソフトによる強度解析を行い、強度的なダメ出しの手直しと並行しながら行っていくと

つだ。ヨコハマホイールのデザイナー的な工

ボックメイキングは、ディープリムシリーズ以外の多くのモデルに採用されている「オーバフランジスポーク」も有名だ。これはリムの端を飛び越してフランジまでスポークデザインを延長する手法。スポークが長く見えるため、同じサイズのホイールでもより大きく見えることが特徴である。

このオーバフランジスポークは、「AVSモデル」で初めて取り入れたデザイン。このように数値やディテールを追い求めて行く萩原さんの姿勢が、様々なヒット作を生み出す原動力になっているのだ。



特殊サイズ設定を行うところもヨコハマホイールの哲学だと言いつつ、「ヨコハマホイールのラインアップの中には、特定の車種に付けるとカッコイイんだけど、コンプライアンスを遵守する日本のディーラーでは、メンテナンスや車検を受け付けてくれないサイズも用意しています。これは世界的に見ても日本の車検に関する法律が異例なんです」と語る。

確かに、ジュネーブやエッセンでのモーターショーを見れば、車体からホイールが少しはみ出さくらのスタイリングがほとんど。それが「カッコいいホイール」の世界基準になっているのだ。だからこそ、萩原さんはアドバンレーシングにおいても、世界基準に則って「攻めたサイズ」をラインアップする。もちろん日本の車検には通らない領域もあるが、ある程度リスクを犯しても愛車をカッコよくしたいと思うのが本当のクルマ好きであり、アフターパーツはその実現のためにも存在している。という信念なのだ。

「攻めれば攻めただけカッコイイものができあがる。アウトローな気持ちで履くホイールではなく、美意識をへの拘りでもグレイゾーンへも攻め込む」萩原さんのこだわりは設計やデザインだけに留まらない。車種専用の

アドバンレーシングGTはR35GT-Rをメインターゲットに、20インチからラインアップされたモデル。プレーキリアランスは純正フルボルトはもちろん、チューニングシーンで主力のエンドレスレーシングMONO6なども考慮した設計が施された。それ故に、ショップデモカー等のハイチューンドR35がこぞってアドバンレーシングGTをセレクト。それが、R35オーナーから高い支持を受けるようになったキッカケだ。

「試作品ができるまでは、既存のモデルを使ってお色合いの確認をしていますね。今年の新作「RZII」(48ページで紹介)は当初、フランジ部分も塗装で行く予定でしたが、試作品が届いたら、フランジ部分にダイヤモンドカットを入れた方がポップ感を演出できると考えて。東京オートサロン直前に仕様変更をしました。工場の担当者からは「本気で言ってます!?」と言われましてけどね。でも間に合うならギリギリまで仕様変更するのがボクらのスタイルなんですよ。この美へのこだわりが、カッコいいホイールを生み出す原点なのだ。



今となっては当たり前のようにデザインされるコンケイブだが、そのルーツはアドバンレーシングRGのGT-Rデザイン。フェンダー内にギリギリ収まるリム幅とインセットで設計することで、センターへの落とし込み角度を極限までつけたモデルだ。



スポークをフランジまで伸ばしてしまうという新しいデザイン「オーバフランジスポーク」を生み出したのもヨコハマホイール。「AVSモデル」が最初に採用したデザインで、ホイールを大きく見せたいという発想から生まれた造形だ。